まいぶん 埋もれちよ

No. 48

千葉県八千代市
埋蔵文化財通信
2024. 6.25
（令和６年）

新たに見つかった中世城館跡

はじめに

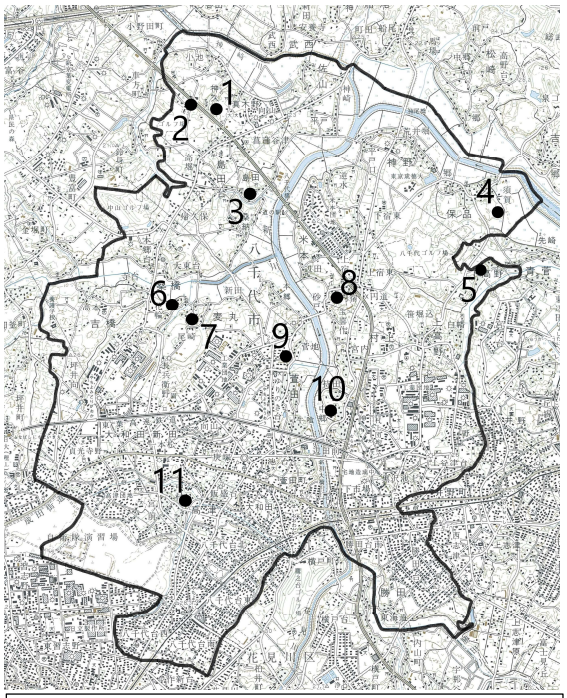
日本の歴史上１１世紀の後半から１６世紀後半頃，平安時代の終わりから，鎌倉時代，室町時代を経て，戦国時代までを中世と呼んでいます。

八千代市内でも，中世の遺跡が少しずつではありますが調査され，文献資料と併せて当時の様子が明らかにされてきています。

その様な中で，令和３年度から令和４年度にかけて行われた，神久保（いものくぼ）地区にある椿山遺跡の調査の結果，椿山遺跡が今まで未確認の城館跡であることがわかりましたので，今号ではその概要をご紹介します。

八千代市内の中世城館跡

八千代市内には，１６世紀代に村上氏が城主を務めたとされる米本城跡と，米本城跡を攻めるために築かれたとされる飯綱砦跡，高木氏が城主を務めた吉橋城跡，尾崎館跡や島田城跡，高津館跡，正覚院館跡，天神遺跡（『八千代市の歴史』で下高野館跡として掲載）の他，神久保寺台遺跡では城跡と考えられる大規模な堀跡が見つかっており，保品には印旛沼を臨む台地縁辺に土塁と要害を示す「りゅうげ」という地名が残され，城館跡があったと考えられています（保品竜害城跡）。



八千代市内の中世城館跡
1 椿山遺跡 2 神久保寺台遺跡 3 島田城跡
4 保品竜害城跡 5 天神遺跡 6 吉橋城跡 7 尾崎館跡
8 米本城跡 9 飯綱砦跡 10 正覚院館跡 11 高津館跡

調査の経緯

椿山遺跡は市域北部の神久保地区に所在する縄文時代と奈良・平安時代の包蔵地です。北側を流れる神崎川から延びる谷に東西を挟まれる舌状台地上に位置し，これまで本格的な調査は行われていませんでした。令和３年に物流倉庫の建設が計画されたことから，調査がおこなわれることとなりました。

建設工事に先立ち，遺構の有無を確かめるための確認調査を令和３年 10 月に行いました。本格的な調査は初めての為，a 地点として調査を行った結果，開発区域の内，2200 ㎡について中世の遺構が所在していることがわかりました。事業者との協議の結果，300 ㎡については，そのまま保存され，残り 1900 ㎡については本調査（記録保存）が行われることとなりました。また，工期等との関係で，一部の調査については，教育委員会に先行して民間の発掘調査組織である㈱地域文化財研究所が行い，残りの調査と全ての整理作業を八千代市教育委員会が行うこととなりました。本調査は令和４年，整理は令和５年に行われました。

椿山遺跡の調査と概要

今回調査したａ地点は，東側に谷を臨む東西に細長い範囲で，調査前から土塁や溝などが地表面の観察で見ることができ，また，中央付近は，長方形の区画ができるように１ｍ～１．５m低く掘り下げられていて，段状に東西が高くなっていました。

調査の結果，土塁３基，溝９条，地下式坑１２基，火葬施設２基，土坑墓１１基，ピット１２４基，土坑１０基，竪穴状遺構２基，屋外炉１基，台地整形区画３ヶ所が見つかりました。これらは，すべて同時に存在していたわけではなく，造られた時期に差があり，先に造られた遺構を新しい遺構が壊している場合もあります。遺構同士壊したり，壊されたりしている状態を遺構の「切り合い」と呼び，出土する遺物と共に，遺構の年代等を考える上で重要な証拠となります。a 地点から見つかった遺構も，切り合い関係から大きく３つの時期に分けることが出来ました。

Ⅰ期

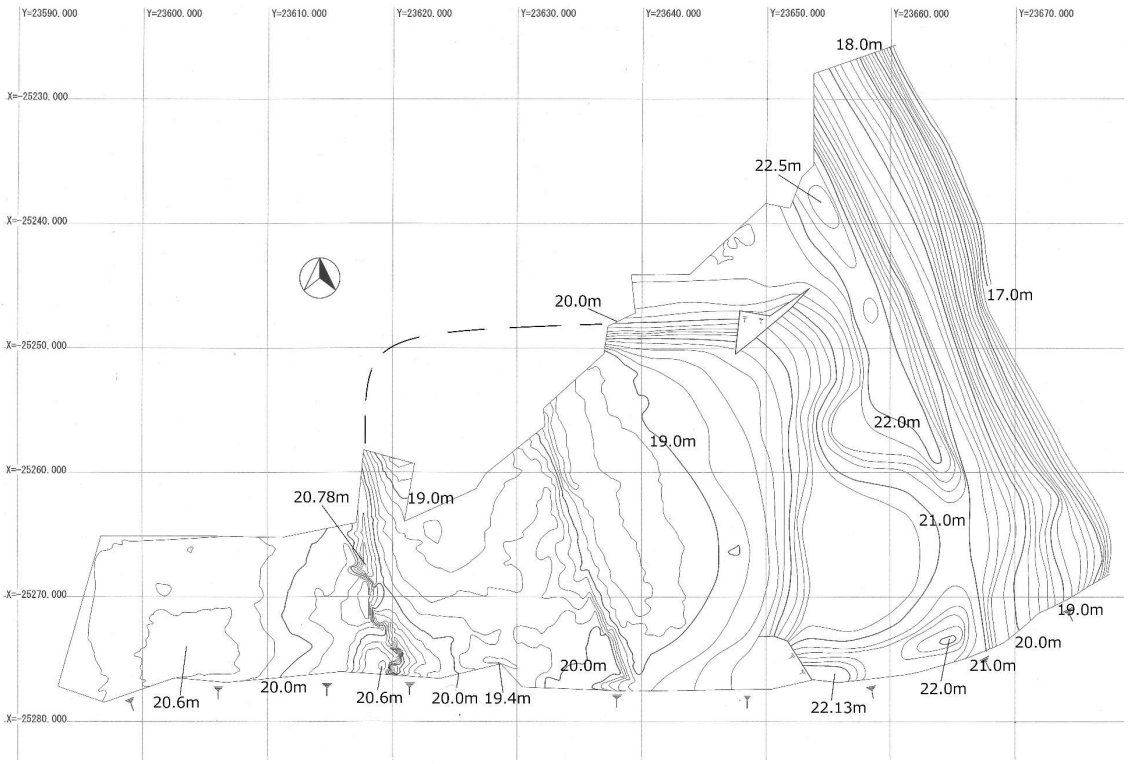
火葬施設２基と土坑墓１１基がこの時期に当たります。東側の谷を臨む場所を，お墓として使用していました。日本の土壌は酸性のため骨が溶け，残らないことも多いのですが，いくつかの土坑墓と火葬施設からは歯や骨の欠片が見つかっています。中でもＤ２１と番号を付けた土坑墓からは，ある程度形を保ったままの頭蓋骨と，副葬品と思われる輸入された白磁の破片が見つかっています。

Ⅱ期

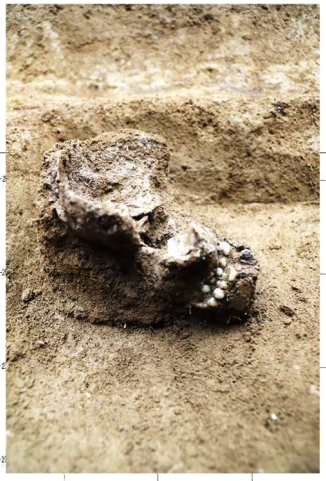
お墓から一転して，人々の生活の場として使用されるようになり，地下式坑が多く造られています。地下式坑は，入り口として地面に深い竪穴を掘り，そこから横方向に掘り広げて地下室を造ったものです。諸説ありますが，倉庫として使われたと考えられています。地下式坑の床面から遺物は見つかりませんでしたが，中に溜まった土の中から擂鉢（すりばち）や内耳土鍋（ないじどなべ），陶磁器の破片等，当時の生活で使用したと考えられるものが見つかっています。

Ⅲ期

土塁を築き，溝で区画し，調査区の中央部分を掘り下げたのもこの時期で，大規模な造成工事を行ったと考えられます。西側の一段高い部分も実は元の地面より掘り下げられており，中央部分と西側部分の境目を掘り残すことで土塁を造っています。中央の掘り下げた区画のほとんどは保存区域であるため，何があったのか明らかにすることはできませんでしたが，西側の一段高い区画には多くのピットが見つかっており，形状などからほとんどが建物の柱跡と考えられ，掘立柱建物があったと想定されます。重複するように存

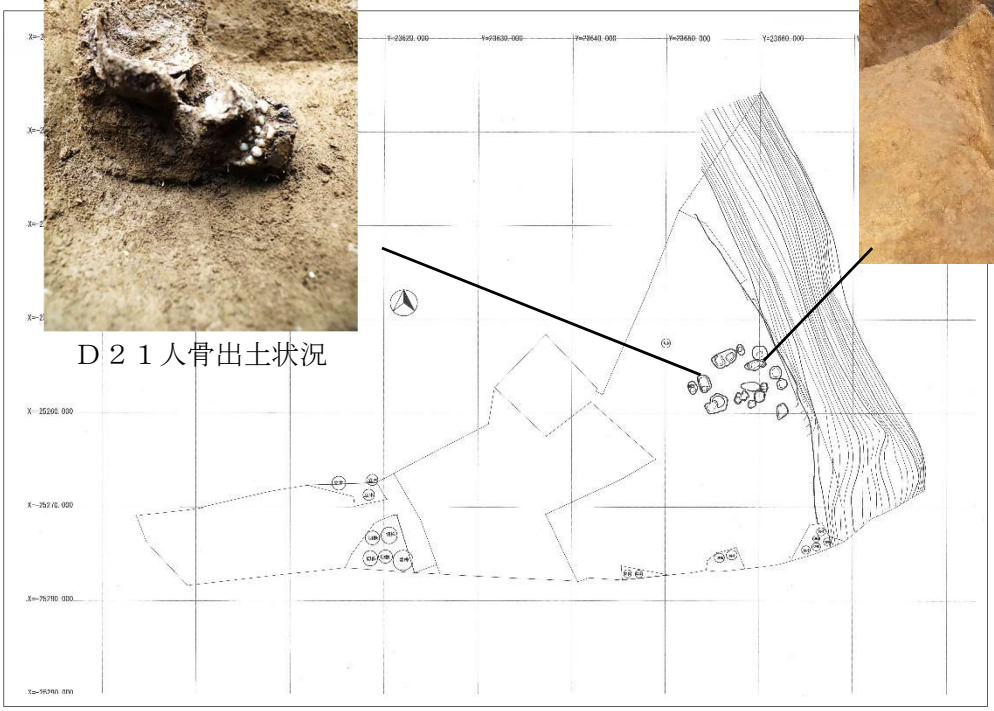


椿山遺跡 a 地点測量図



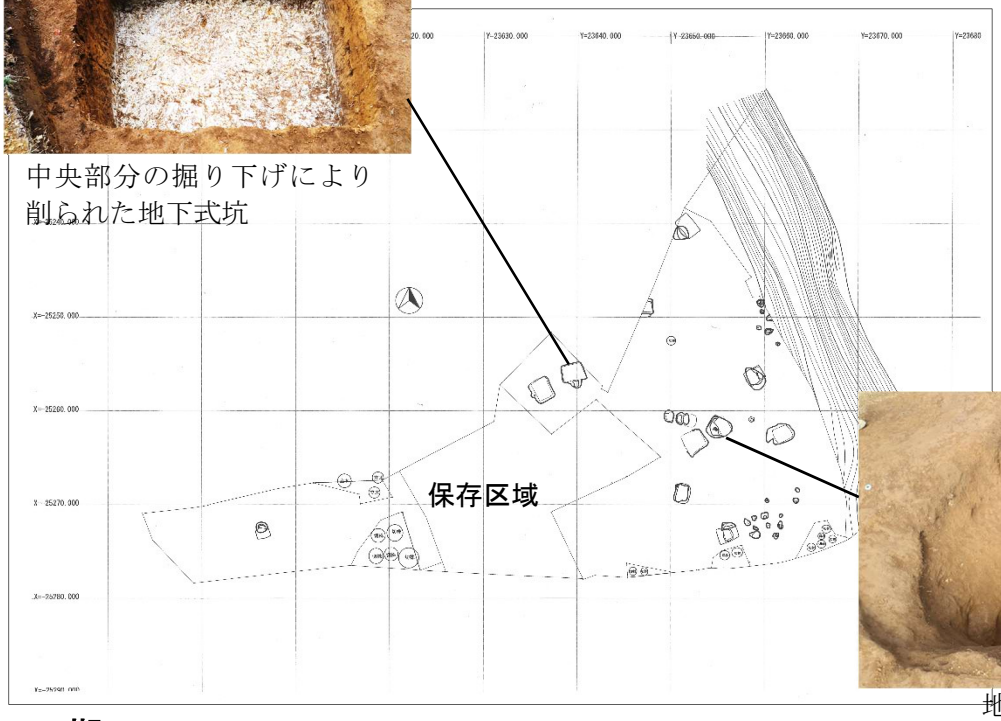
Ｄ２１人骨出土状況

火葬施設(Ｄ１８)



Ⅰ期

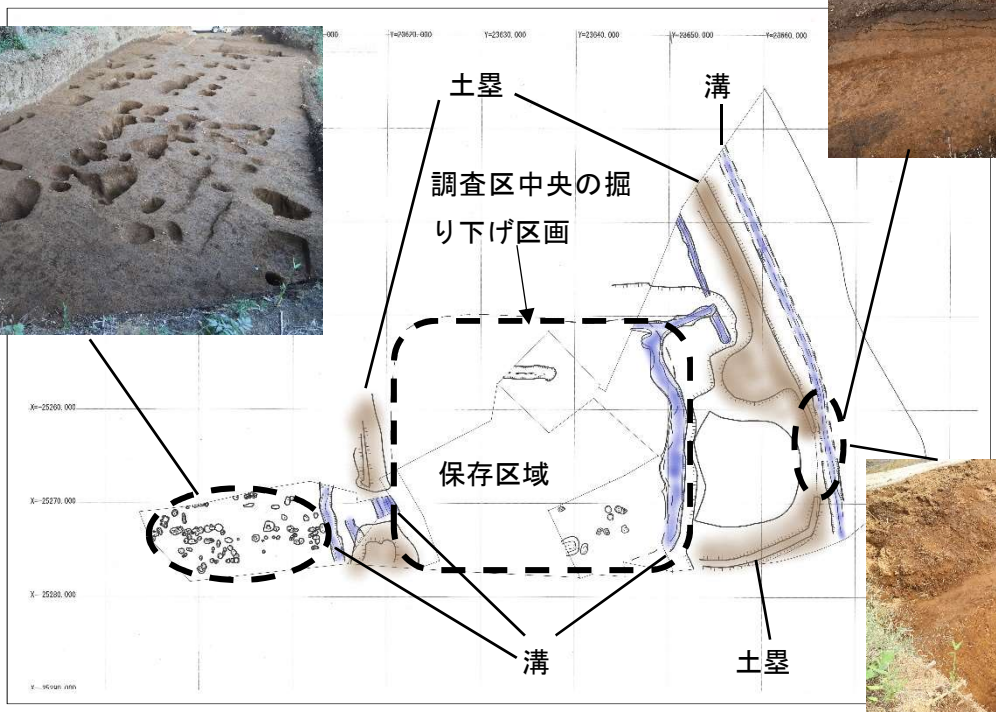
中央部分の掘り下げにより
削られた地下式坑



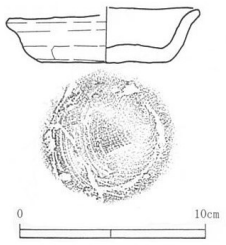
地下式坑（Ｄ０３）の入口

Ⅱ期

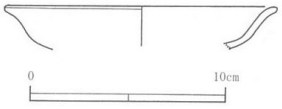
土塁の断面



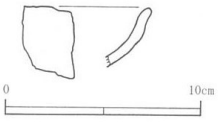
Ⅲ期



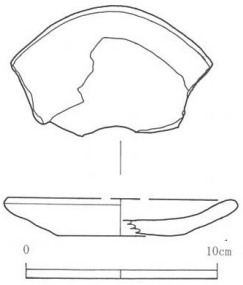
かわらけ



白磁

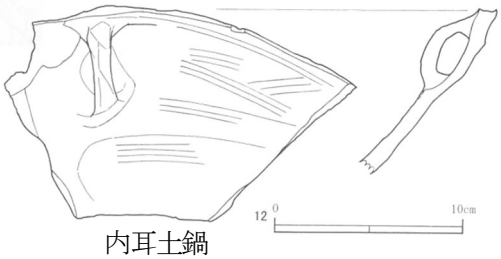


天目茶碗

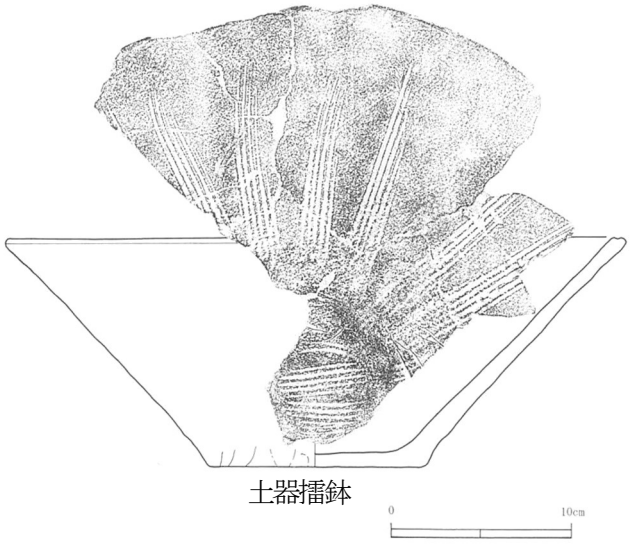


瀬戸・美濃　丸皿

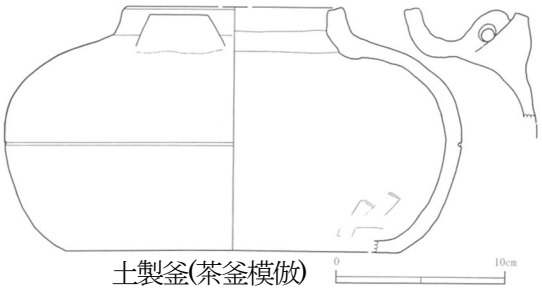
常滑　甕



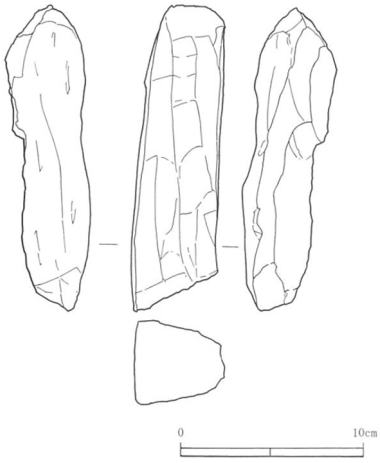
内耳土鍋



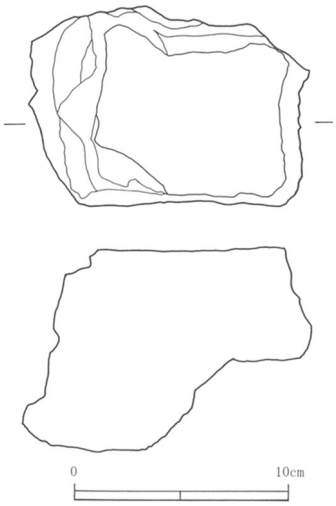
土器擂鉢



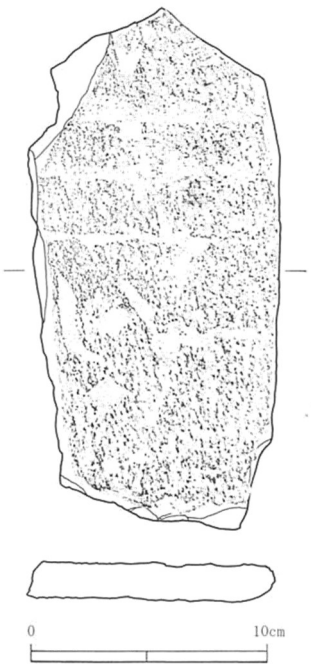
土製釜(茶釜模倣)



砥石



置き砥石



種字板碑

※図の縮尺は不同です。各遺物に縮尺がついています。

在しているのは，比較的短い間に建替え等が行われたためでしょう。中央の掘り下げた区画も今後の調査で同様のピット群が見つかるかもしれません。東側の一段高い区画は，新たに築かれた土塁により，それまでの遺構のほとんどが覆われてしまいます。

椿山遺跡ａ地点の時代と性格

遺構の切り合いにより大きく３つの時期に分けることが出来ましたが，実際にいつ頃の遺跡だったのでしょうか。

出土した遺物は，土器擂鉢や土鍋，かわらけや，瀬戸・美濃窯の皿や擂鉢，常滑窯の擂鉢や甕等の生活に関連する陶器類を中心に，砥石や鉄滓等の鍛冶に関係する物の他，茶の湯に使われる天目茶碗や，輸入された青磁や白磁なども見つかっており，土豪層等，在地の有力者がいたと考えられます。また，お墓だった頃に建てられていたであろう板碑等も見つかっています。

出土した土器や陶磁器類は１５世紀～１６世紀のものがほとんどです。Ⅱ期の地下式坑を埋めている土の中から１５世紀終わり頃から１６世紀半ば頃の土器が出土していることから，Ⅱ期は１５世紀代以降，Ⅲ期は１６世紀後半以降と考えることができます。遺構の床面から出土した遺物がほとんどなく，遺構毎の年代を決めることが難しいため，Ⅱ期からⅢ期への移り変わりの時期は，調査の進展により変わる可能性はあります。大規模な土木工事を行い，土塁や溝等を築き防御性を高めた生活空間を造りだしたのは，15 世紀後半から始まる戦国時代の中での変化であろうと考えられます。

遡ってⅠ期の年代はどうでしょうか。Ⅰ期の遺物と考えられるものとして，板碑が出土しています。板碑は供養のために建てられた石製の卒塔婆で，日蓮宗では「南無妙法蓮華経」と漢字で法華経の題目が，他の宗派であれば種字と呼ばれる仏を示す梵字が刻まれ，建てられた年号や月日等が刻まれます。今回出土した板碑は全て破片で，建てられた年号等がわかるものはなく，１点だけ種字が刻まれているものがありました。直接建てられた年代はわかりませんが，この種字板碑から，ある程度の年代を絞ることができます。

応永四（１３９７）年に，鎌倉公方足利氏満が法華経寺の領地であることを保証する書簡を出しており，その中に「臼井庄神保郷小室村　同伊毛窪　嶋田　平戸　真木野等村々・・・」と書かれています。伊毛窪と記述されているのが神久保になります。このことから遺跡の所在する神久保地区は，少なくとも１４世紀末には日蓮宗である法華経寺の領地であることがわかっています。日蓮宗であれば板碑には題目が刻まれるため，種字板碑が出るということはそれ以前のお墓であると言えます。

以上から今回調査した範囲については，Ⅰ期：１４世紀後半以前のお墓。Ⅱ期：１５世紀～１６世紀，倉庫群として利用。Ⅲ期：１６世紀代以降。造成し，土塁や溝などで区画した屋敷地と考えることができます。調査した範囲の外側にも，造成されたと思われる平らな面や土塁，溝などが地表面の観察から見ることが出来ました。今回調査した地点と同じように，土塁や溝で区画した中に屋敷を建てた，屋敷群のような場所であったのかもしれません。

埋(まい)やちよ　No.48
―千葉県八千代市埋蔵文化財通信―
令和６年６月 25 日
編集・発行　八千代市教育委員会
文化・スポーツ課文化財班
八千代市大和田 138-2
〒276-0045　☎047(481)0304

やっち